



Title	＜翻訳＞トゥルシーダース作 『ドーハーヴァリー』 (3)
Author(s)	長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 2024, 22, p. 3-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97760
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

トゥルシーダース作
『ドーハーヴァリー』(3)

長崎 広子 訳・註

訳者解説

本編は、16世紀のヴィシュヌ派ラーマ信仰の詩人トゥルシーダース著『ドーハーヴァリー（二行詩集）』*Dohāvālī*の第201から300詩節までの日本語翻訳と解説である。

翻訳にあたって、Nāgarīpracārīnī Sabhā 版と Gītā Press 版のテキストを使用した。S. P. Bahadur (1978) による英訳はこなれた意識であり、原典に忠実ではないため、参考に留めた。

第200詩節までと同様に、本編ではラーマ神へのバクティ（信愛）が語られており、きわめて宗教的な内容である。聖都カーシー礼賛（234）やシヴァ神への祈り（238-240）もあるが、ラーマの信者がどのようにラーマ神に信愛を抱くのかと、それに応えてラーマが示す愛が中心的に描かれている。注目すべきは、ラーマ信仰の聖典となったトゥルシーダースの代表作である『ラームチャリットマーナス』（ヒンディー語版ラーマヤナ物語）に描かれた個々の登場人物の特性や特質が簡潔に述べられている点である。ラーマからみた家族のなかで、父ダシャラタ王（218-221）と母カウサリヤー妃（212）、スミトラ妃（213）、弟バラタ（205-209）、弟ラクシュマナ（210）、弟シャトルグナ（211）、妻シーター（214）が称賛されている。その一方で、ラーマを森に追放し息子のバラタに王位を譲ることをダシャラタ王に要求したカイケーイー妃（216-217）はラーマの言葉を曲解した愚者であると批判されている。なお、『ラームチャリットマーナス』ではこれは神々の計画の一部とされており、ラーマに悪意を持っていなかったカイケーイー妃が侍女マンタラーの甘言に騙されてダシャラタ王に残酷な要求をしたのは、ラーマがヴィシュヌ神の化身として宿敵ラーヴァナを倒すという物語を成立させるために神々がそれを望んだからであるとされている。その一方、同じ著者は本作品『ドーハーヴァリー』でカイケーイー妃に低評価を与えており、相反する描写からトゥルシーダースの宗教観と倫理観の変遷を読み解くべきであろう。『ラームチャリットマーナス』が性善説に基づくものでありながらも、理由の如何によらず行動とその結

果はそれを起こした本人に帰するという現実的な視点を本編で与えている点は注目に値する。

他の登場人物として、鷲のジャターユ（222-227）とハヌマーン（229-234）とラーマ軍に投降し兄ラーヴァナを裏切ったヴィビーシャナ（207-208、215-216、228）とラーマと同盟を結び兄ヴァーリンを裏切ったスグリーヴァ（207-208、215-216）が多く描かれている。鷲のジャターユはラーマの妻シーターを連れ去る羅刹王ラーヴァナに果敢に挑み、敗れるものの、ラーマとラクシュマナにシーターの誘拐を伝えて死んだため、ラーマ神への信愛を高く評価されている。

他には、信愛の模範として、チャータカ鳥の雨雲への無償の愛が称賛されている（277-300）。

さらに、この世は幻であるとするヒンドゥー教思想に基づき、神が作り出したこの世の不可知性を説く哲学理論が示される一方で、女が人を惑わす者として批判的に描かれている箇所（262, 265-269）からは、女性が信仰の妨げとして位置付けられていた 16 世紀の世相が伺われる。それらの描写は、聖者トゥルシーダースに理想を求める現代のヒンドゥー教徒を戸惑わせるものであるのだろう。ヒンドゥー教の普及活動を行う出版社 Gītā Press 版の現代ヒンディー語の注釈では、寡婦の殉死を扱った詩節（253-254）で、より受け入れやすい今日的な訳がされており、それに従えばトゥルシーダースは女性の人権の擁護者であったことになる。古ヒンディー語の韻文の多くには語の格が示されないため多様な解釈の余地はあるが、知識を持ちながら感覚器官に囚われる中途半端な状態を殉死に失敗した女性に喩えており（253）、先入観なしに読めば、寡婦殉死は全うすべきであるとされているように解釈できる¹。それに続く第 254 詩節で Gītā Press

¹ トウルシーダースを描いた聖者伝文学では、1700 年頃に Priyādās が描いたものにトゥルシーダースが死んだ夫を生き返らせて寡婦を殉死から救う逸話が描かれ、トゥルシーダースを女性の権利の擁護者とする評価は現代にいたるまで強い。その一方でトゥルシーダースが作品中に描いた女性蔑視ととらえられる詩節をめぐって賛否両論がある。詳しくは拙

版は、夫の死後も家に留まり貞女と呼ばれるべきであるとしているが、異なる解釈の余地がある。なお、イギリスの植民地時代から、寡婦殉死はインドで批判的に捉えられるようになり、例外はあるものの 20 世紀には一般に悪習とされるに至り、そうした世論形成に Gītā Press 社が貢献した可能性はある²。Gītā Press の解説には、現代の思想になじまない詩節において、解釈を誘導して聖者トゥルシーダースを擁護する部分が見られる。本編の日本語翻訳は、Gītā Press 版のバクティを強調した解釈には依らず、必要な情報は注に付し、原文に忠実に行うよう努めた。原文に必要以上に意味を付加して訳していないため、読みにくい部分はあるが、ヒンドゥー教研究への一資料となれば幸いである。

なお、それぞれの二行詩は独立したものであるが、なかには前提知識なしには内容の理解が困難なものがあり、エディションによっては小見出しを付けているものもある。本編の小見出しは、それらを参考にした部分もあるが、訳者によるものである。

稿「太鼓と女は叩くべし：『ラームチャリットマーナス』の女性観」
『印度民俗研究』第 18 号, pp. 49-59 を参照。

² 例えば Mukul は極右的な思想と Gītā Press 社を関連付けている。Akshaya Mukul, *Gita Press and the making of Hindu India*, Noida: HarperCollins Publishers India, 2015.



<信徒へのラーマの愛>

201. ラーマと別離して、友は悲しみ、すべての男女はうろたえる。バラタとラクシュマナとシーター妃の状況を察し、主^{ラーマ}の目にはいつも涙が浮かぶ³。

202 シーター妃へのラクシュマナ⁴の行動とバラタの愛と性質を、語るにはラクシュミー女神が、知るにはラグ族の主（ラーマ）が優れている。

203 バラタとラクシュマナとシーター妃の愛はラーマ[のみ]が知り、語ることはできない。それを聞いて考えてトゥルシーダースが語ることは、傲慢かつ愚かの極み⁵である。

204 皆は語る、[主ラーマは]全能であり、日夜苦難に耐え、[すべてを]聞き理解し、すべての点で主の義務をきちんと果たされた。

<バラタ>

205 ブラフマー神やヴィシュヌ神やシヴァ神の地位を得ても、バラタが

³ ラーマとの別れとは、ラーマがカイケーイー妃の陰謀で森に追放されたときを指す。アヨーディヤーの住民のみならず、弟のバラタとラクシュマナと妻シーター妃も苦しみ、それを見てラーマ自身も涙を浮かべて動揺するという意味。

⁴ 原文では sumitrā suvana(スミトラの息子)。

⁵ 原文では saṭhatā kī rīti (偽りの方法)。

支配[欲]に溺れることはなかった⁶。カーンジー⁷の水滴[ごとき]が乳海を破壊することなどだろうか？

206 贅沢はチャクワー鳥の雌、バラタはチャクワー鳥の雄、[バラドヴァージヤ]聖者の命令は狩人。その夜に庵という鳥籠に[両者は]置かれ、[何もなく]朝になった⁸。

207 富を得た泥棒は道で心浮かれていたが、札入れを金持ちが取り返した。そのように、スグリーヴァとヴィビーシャナはバラタに会ってなった（自らの驕りを恥じた）⁹。

208 トゥルシーダースは語る。[ヴィビーシャナと猿の主（スグリーヴァ）を]ラーマは称賛し、バラタは立ち上がってラーマと同等に認めて（扱い）お会いになった。それでも、ヴィビーシャナとスグリーヴァは自責の念に

⁶ 母カイケーイーの陰謀でバラタがアヨーディヤーの王位を得ることもなっても、兄ラーマを慕い、彼が森に追放されている期間に摂政を勤めたことを指す。

⁷ 米の煮汁などを発酵させた汁。酢の一種。

⁸ 仲が良いことで知られるチャクワー鳥のつがいは夜には離れて鳴くとされ、詩作で好まれるモチーフである。森に追放された兄ラーマを迎えに行く途中でバラタは聖者バラドヴァージヤの庵を訪れる。聖者は贅沢なものを見せて彼の意思を試した。贅沢品をチャクワー鳥の雌、バラタをそのつがいの雄にとたえられているのは、非常に仲がよいとされる雌雄がひとつの鳥籠に閉じ込められても夜には決して交わることがないという意味で、バラタの不動の精神を示している。

⁹ 兄ヴァーリンを倒すことと引き換えにラーマと同盟を結んだ猿のスグリーヴァと、兄ラーヴァナを裏切ってラーマ軍に寝返ったヴィビーシャナはラーマの信徒と自負していたが、兄ラーマへのバラタの信愛を見たとき、自らが兄に対して行ったことを悔いたという意味。

苛まれる¹⁰。

209 バラタはラーマと同じく黒い身体を有し、全ての美と徳の宝庫であり、奉仕者に喜びを与える者である。[バラタを]念想すると、すべての安寧がある。

<ラクシュマナ>

210 愛らしいラクシュマナの甘美な姿を愛をこめて念想しなさい。[それは、]幸福、富、名誉、勝利、徳、吉兆の住処である。

<シャトルグナ>

211 シャトルグナの名は美しく、麗しく、徳の家。[彼に]奉仕し、念想すると、すべての幸福が得られる。[彼は]すべての吉兆を与えてくださる。

<カウサルヤー妃¹¹>

212 カウサルヤー妃の安寧に満ちた姿に敬礼すると、美德、吉兆、吉事[がおこり]、ラーマとシーター妃が恩恵をかけてくださる。

<スミトラー妃¹²>

213 この世でスミトラー妃の名を念じ[夫への献身の]誓いを立てる女性は、ラクシュマナとシャトルグナ¹³のような息子を得て、夫の御足に愛を捧げる。

¹⁰ ヴィビーシャナは兄ラーヴァナを、スグリーヴァは兄ヴァーリンを裏切った自身の行為に対して自責の念を抱いている。

¹¹ ラーマの母。

¹² ラクシュマナとシャトルグナの母。賢夫人で知られる。

¹³ 原文では、シャトルグナを指す Ripudavana(敵を滅ぼす者)が使われている。

<シーター妃>

214 シーター妃の御足に敬礼し、念想し、その名で誓いを立てると、女性は貞女となり、愛しい命の主（＝夫）の愛を得るだろう。

<ラーマの行いの神聖さ>

215 トゥルシーダースは語る。ラーマの行いという庭には如意樹のみがある。罪深い樹¹⁴である猿（スグリーヴァ）と羅刹（ヴィビーシャナ）は、「[ラーマ]神は我々に逆のことをなさせた（＝罪深い者にもその庭に居場所を与えた）」と語る。

<カイケーイー妃>

216 すべての母とバラタと[ラクシュマナとシャトルグナ]兄弟と師と[アヨーディヤーの]町の人々の[善い]性質を見るが、カイケーイー妃を見ることはない、ランカーの王（ヴィビーシャナ）と猿の王（スグリーヴァ）は¹⁵。

217 ラグ族の主の素直で優しい言葉を、愚者（カイケーイー妃）は曲解した。たとえ水が平坦であっても、蛭は水中を曲がって進むように。

<ダシャラタ王>

218 ダシャラタ王という御名は、すべての安寧の実を結ぶ美しい如意樹である。大地、家、富、ダルマ、高德と美の蔵である息子[という実を結ぶ]。

¹⁴ 原文は kalitaru（セイタカミボバラン）。猿と羅刹として生まれた身を卑下して「罪深い樹」に喩えている。

¹⁵ 兄ラーヴァナを裏切った弟ヴィビーシャナと兄ヴァーリンを裏切った猿のスグリーヴァですらカイケーイー妃を直視できないと描かれている。ラーマの追放と息子バラタの王位を夫であるダシャラタ王に求めたカイケーイー妃を兄の死を招いた両者より下に位置づけている。

219 トウルシーダースは語る。真実と等価のダルマはないとダシャラタ王は分かっておられた。そのために、ラーマを捨て、ラーマと別れて[自らの]命をお捨てになった¹⁶。

220 ラーマとの別離[の悲しみ]でダシャラタ王は亡くなった。美しい死[のその境地]に、賢者の心すら到達できない。トウルシーダースは語る。吉兆の死という神聖な樹に愛の水をやりなさい。

221 生死においてダシャラタ王が名誉を得たように、誰ができようか。生きている間はラーマを養育し、ラーマと別れてその身を捨てられた。

<ジャターユの運命>

222 トウルシーダースは語る。卑しくとも、シーター妃のために傷つき、膝に抱かれて ^{ラーマ}主を見つめ、鷲の王（ジャターユ）は美しい死という解放（解脱）を得た。

223 トウルシーダースは語る。遁世者、カルマヨーガ行者、信徒、賢者、神仙、高德な者も卑しい者も、鷲の王の死を聞き、羨んだ。

224 [前世で]死に、[現世で]死に、[来世で]死ぬだろう、すべての時のなかで。[しかし]誰も今まで鷲の王の死[の境地]を得ていない。

225 トウルシーダースは語る。死んで解放を得る者もいれば、生きながら解放を得る者もいる。解放の中にも違いがある。鷲の王の死が最も優れている。

¹⁶ ダルマを真実ととらえ、カイケーイーとの約束を守ることを真実と考え、ダシャラタ王が最愛の息子ラーマを森に追放し、その悲しみで亡くなったことを、自らの命さえも真実のために犠牲にする潔さとトウルシーダースは称賛している。

226 ラグ族の主（ラーマ）は苦しむジャターユを見て、彼（ジャターユ）は二人の勇者（ラーマとラクシュマナ）を見て、シーターの[ラーヴァナにさらわれた]様子を語り、「シーター妃とラーマ神万歳」と言ってその身を捨てた、強い意思を持つ者（ジャターユ）は。

227 ダシャラタ王への十倍の信愛をこめて、彼（ジャターユ）のための[吊いの]勤めを行い、慈悲の海ラグ族の王である主（ラーマ）は、弟（ラクシュマナ）とともに悼んだ。

<ラーマの恩恵>

228 トゥルシーダースは語る。[ラーマは、]船頭、羅刹（ヴィビーシャナ）、鳥（ジャターユ）、獣（猿と熊）を丁重に敬った。ラーマの恩恵はすべてのめでたい吉兆の蔵。

<ハヌマーンの念想>

229 風神の息子（ハヌマーン）の姿は美しく、吉兆で、喜びに満ちている。ラーマの使者（ハヌマーン）を念想すると、すべての神通力が手に入る¹⁷。

230 沈着で、勇敢なラグ族の勇者（ラーマ）の愛しい風神の息子（ハヌマーン）を念想し、到達しがたい、到達可能なすべての行いをなせ。成就が得られると理解せよ。

231 [ハヌマーンは、]幸福と喜びと吉兆という睡蓮の月であり、美德という蓮の太陽である。[その]ハヌマーンを心に抱き勤めをなさい。すべてが成就し、吉兆が到来する。

232 心にハヌマーンを抱き、すべての仕事、神聖な時、すばらしい徳、吉

¹⁷ kara(手) kamala(蓮) tala(上)。「蓮の手の上に」>「手に入る」の意味と解釈した。

兆を知りなさい。名声とすばらしい栄華[が得られる]。

233 勇者の極み、勇敢で、賢い風神の息子。念想すれば、すべての幸福、富、喜び、吉兆を与えて下さる方。

<腕の痛みを鎮めるための祈り¹⁸>

234 トゥルシーダースの身体という池にある喜びの蓮を、腕の痛みという力強い象が踏みつける。慈悲の蔵であり、猿のケーサリー¹⁹の息子（ハヌマーン）よ、見てください。

235 樹の^{うろ}洞という腕に、病という蛇がむりやり入り込んだ。鳥の王（ガルダ）に乗る方（ヴィシュヌ神）よ、苦しみが癒えるようにすぐに取り出してください。

236 [私の]腕という樹は喜びの鳥の住処であったが、ひどい痛みと激しい熱が生じた。ラーマの恩恵という水をすぐに撒いてください、哀れな者のために。

<聖都カーシー>

237 輪廻転生における解放[を与え]、智の宝庫であり、罪を滅ぼすものであると知り、シヴァ神とパールヴァティー妃が住むカーシーにどうして奉仕しないのか？

<シヴァ神>

238 すべての神々たちが燃えてしまう恐ろしい毒を飲みほした方（シ

¹⁸ トゥルシーダースは腕の病に苦しんだときにハヌマーン神に祈って治癒したとされる。

¹⁹ ケーサリーはハヌマーンの父の名であり、獅子の意味ももつ。獅子は象に勝るとされる。

ヴァ神)を、愚かな心よ、称えないのか。慈悲深いシャンカラ(シヴァ神)のような方が[他に]おられるのか？

<シヴァ神への祈り>

239 昼には詐欺師の詐欺、夜にはここかしこに泥棒[がはびこる]。シャンカラ(シヴァ神)よ、美しい目尻で見て、自らの町(カーシー)をお守りください。

240 あなたは自らの20年間に自身で^{カーシー}町を手掛けられた²⁰。この世界について、どのように[救済を]懇願すればよいのだろうか、^{ヴィシュヴァナート}世界の王よ。

<神の遊戯の不可知性>

241 誰かが罪を犯し、誰かが利益と享受を得る。神の行い(遊戯)はとても不可思議である。誰がこの世で知ることができようか。

<虚妄という障害>

242 愛という身体が虚妄という病にかかると、大きな障害が生じる。トゥルシーダースは語る。良い医者よ、病をすぐに止めてください。

<自尊心>

243 [愚かな者は]「私が、私の行いがすばらしい」と、過重な荷を頭にのせて意地を張り、鸚鵡や繭の小虫(蚕)や猿のように、悪に支配されてしまう²¹。

²⁰ 破滅が起こるとされるシャンカラ(シヴァ神)の20年を指し、一説にはヴィク라마歴1665年から1685年にあたるという(Tivālī 1954: 354)。Gītā Press 版(1995: 68 fn)によれば、この2行詩は、トゥルシーダースがカーシーに暮らしていた時に流行したペストから町を救ってほしいとシヴァ神に懇願したものと考えられている。

²¹ 鸚鵡が木の枝にとまって籠に閉じこもり、蚕が繭のなかに閉じこもり、

<影の不可知性>

244 鏡の中に影が、どの道から侵入し、どの道から出ていくのか言ってくれ。トゥルシーダースは語る。生物の主がこの世において生物の行動をこのように作られたのだ。

<神の幻の不可知性>

245 喜びの海（最高神）は喜びの眠りに支配され、夢の中であらゆることをなさる。幻を司る主の幻をこの世で誰が知ろうか？

<虚妄と覚醒>

246 生物は、幸福に眠る時はシヴァ神のように、夢の中で何がしか [の奇跡] を行う。目覚めると、哀れで汚れたその者は、悲しみという財に動転する。

247 夢の中で、王が乞食になり、貧者がインドラ神になる。目覚めると、何の損得もない。そのように、[この世の]虚妄を心で観よ。

<迫りくる死>

248 トゥルシーダースは語る。卑しい者は、見て、経験して、聞いても、理解しない。[お前の]髪を手で掴み、死は毎日勢いよく平手打ちをくらわせているというのに。

<死が行うこと>

249 この世では、死という占星術師が、手に^{カルマ}業という白墨[を持ち]、迷妄という板に、[この世の]罫にかかった万物という数を、引いて掛けて、数えて消す²²。

猿は餌につられて籠に入れられることを意味しているようである。

²² 数を消したり、足したりするという喩えは、占星術師が人の運勢をみる際に計算することを指している。

<感覚器官>

250 話すために舌を作られ、聞くために耳を作られた。愛をもって思うために心を[作られた]、賢い最高神は。

<有属性を語らず無属性を論ずること>

251 トウルシーダースは語る。無知を語らずに知を語り、闇を語らずに光を語り、有属性を語らずに無属性を語る者は、[愚かな]師である²³。

<無属性と有属性>

252 数は無属性であり、文字は有属性である。両者の様式は知られるべし。[どちらを]捨てて、[どちらを]残すか、それぞれに良さがある。トウルシーダースは語る、[これが]美しい考え方であると。

<寡婦殉死の喩え>

253 最高原理を知りながら、感覚の対象に囚われた知性に執着する。[それは]半分燃えて薪から逃げだした^{サティイー}寡婦のようである。

254 頭をさらせと誰が言った？ 親しい者たちは禁じた。家にいて^{サティイー}貞女と呼ばれるか、主人との死別で焼かれるか²⁴。

²³ 物事の本質を知るために相反する知識が不可欠であるにも関わらずそれがなされていないとし、有属性（サグナ）の知識を説明せずに無属性（ニルグナ）を語る者を愚かな師と論じていると解釈した。Gītā Press 版の解釈では、それをトウルシーダースにとっての「我が師」としている。

²⁴ Gītā Press の解説は 253 から 254 詩節を感覚器官に囚われている状態を描写したものとし、254 番では殉死の火から逃げ出した貞女に対して夫との死別後は別離の苦しみの火に焼かれて家で貞女と呼ばれた方がよいと解釈している。Callewaert (2009) は「頭をさらす *sīsa ughāṇā*」を、Jāyāsī 著 *Padmāvat* 第 648 詩節を例に挙げ、寡婦殉死の際に髪分け目の辰砂を見せる行為と関連付けている。しかし、「頭を覆わない、さらす」はインド

<トゥルシーダースの妻の言葉>

255 「愛しい人よ、[信仰のために]白亜や白檀や樟腦のすべて[を所有しながら]、妻を捨てるのはよくないことです。白亜に混ぜて私も[置いて]ください。あるいは[すべてを捨てて]汚れない知性と遁世[を貫いてください]。』」²⁵

<神の居場所>

256 家を持つと家が遠のく。家を捨てると家庭が壊れる。トゥルシーダースは語る。家と森（遁世）の間にラーマの愛の町がある。

257 背を向けると後ろを付いてくる。向き合うと離れていく。富は影のようなものだと知り、日々を座って（＝執着せずに）過ごしなさい。

258 トゥルシーダースは語る。希望の女神という名の奇異な神がいる。奉仕すると悲しみを与え、背くと喜びを与える。

<鸚鵡の愛>

259 あの綿の木で、あの鸚鵡が、いつも春に奉仕する（＝ついばみ、綿が飛んで何も残らない）²⁶。トゥルシーダースは語る。[その]愛の偉大さを聞

では一般的に女性として恥ずべき行為とされており、また 253 番では殉死を完遂しなかったことを否定的に描いている点からも、254 番の「頭をさらす」は一般的な「恥をさらす」を意味し、それが寡婦殉死を完遂しなかったことを指している可能性がある。原文には多様な解釈が可能であり、本翻訳はそのひとつの解釈に基づくものである。

²⁵ トゥルシーダースが世俗を捨てたのちに再会した妻が語った二行詩とされている。宗教的な生活と家庭との両立か、完全な遁世のどちらかを選ぶように迫っている。Gītā Press 版 (1995: 73)によれば、その後トゥルシーダースはすべての持ち物を捨てて、完全な隠遁生活に入ったとされる。

²⁶ 綿の木は特に鸚鵡がオレンジ色の花を見てついばみにくるが、何も得ら

いて、聖者^{サント}も称賛する。

<信愛の妨げ>

260 経験しても理解しない。偽りの徳を聞いて、知性は貧しくなる。虚妄に満ちたもの（幸福）は目に見える水銀。温度が下がると固まる（汚名を得る）²⁷。

261 賢者、修行者、勇者、詩人、学者、徳の家（聖者）、この世において誰かの欲があざ笑われなかったことがあろうか。

262 富の誘惑が誰を醜惡にしなかっただろうか。支配力が誰を聳しなかっただろうか。鹿の眼（女性）という目の矢が刺さらなかった人がいようか。

263 世間に^{マヤー}幻の恐ろしい兵が溢れた。將軍は愛欲たち²⁸で、高慢と虚偽と偽善は[その]兵士である。

264 友よ、愛と怒りと欲の三つは強力な悪である。知識の家である賢者^{ウニ}の心を一瞬にして動揺させる。

265 欲には願いと高慢の力があり、愛欲には女しかなく、怒りには辛辣な言葉の力があると、優れた賢者は考えて語る。

れないことの喩えとして詩でよく描かれる。

²⁷ pāraḍa siddhi nāṃ (水銀の温度が下がる) に関連して、kalaṅka (固まる) と解釈した。さらに、nāṃ には名前、kalaṅka には汚点の意味があるため、「汚名を得る」の掛詞と解釈した。

²⁸ Gītā Press 版によれば、愛欲たちとは、「愛欲、怒り、傲慢、執着、迷妄、嫉妬」を指すという。

266 愛欲、怒り、貪欲、傲慢などは迷妄の強力な兵士である。その中でも極めて恐ろしい悲しみを与えるものは、迷いの姿をした女である。

267 火は何を燃やすことができないか。何が海に入ることができないか。力のある女²⁹が何をできないだろうか。この世で死が誰を飲み込まないだろうか？

<女は災いの源>

268 運勢図^{ホロスコープ}の動きを心で考えて見よ。恐ろしい敵[の第六室]と死[の第八室]の間に女[の第七室]がおわす³⁰。

269 若い女の身体は灯火の炎のようなもの。心よ、蛾になるな³¹。ラーマを称え、愛欲と傲慢を捨て、常に[高德の者たちと]交誼を行いなさい。

<障害>

270 愛欲、怒り、傲慢、貪欲に囚われ、悲しみの姿をした家に執着した愚か者が、輪廻転生の井戸に落ちて、どうしてラグ族の主を知ることができようか。

271 運勢に囚われ、また風[の病]に支配され、また蠍にかまれた者に酒を飲ませるとは、どんな治療か言ってみろ。

²⁹ abalā (女) prabala (強力な)。女性名詞である abalā (力のない者) は女と同義。力のない者とされながら女には人を迷わせる力があると語っている。

³⁰ インドの占星術で作成される運勢図の中で、第6番目の室は敵で、第七番目の室は女で、第八番目の室である死と関連していることと、女性問題で敵が増えたり死に至ることもあることを掛け合わせている。

³¹ 燈明の炎を女性に喩え、それに近づき燃えて灰になる蛾は愛に囚われて身を亡ぼす男やその心として、愛を描く韻文でよく用いられる。

272 生類の悪意にもまれ、迷妄に支配され、ラーマに背き、性愛と愛欲に囚われた者が、どうして夢の中でも富や徳や吉兆や安息を得られようか。

273 知性とは、語りがたく、理解しがたく、達成しがたい。たとえ偶然に獲得できても、さらに多くの障害がある。

<足るを知る>

274 悪人の覚醒、この世の浄化、心の制御、一族の浄化をする者は、くたくたに疲弊して死ぬ。夢の中でも幸福と良い知識は得られない。

275 友よ、純粋な満足がなければ、誰が安息を得られようか。水のないところを船が進むのか。どんなに努力しても、疲弊して死ぬ。

<幻の威力>

276 神、人、賢者、誰であっても、恐るべき幻が魅了しない者はいない。このように考えて、心の中で大いなる幻の主（ラーマ）³²を称えなさい。

<チャータカ鳥の信愛>

277 唯一の信頼、唯一の力、唯一の願い、唯一の信仰。唯一のラーマ・ガナシュヤーマ³³のために、チャータカ鳥というトゥルシーダースはいる。

278 トゥルシーダースは語る。雲（ラーマ）よ、時に頭上に雨を降らせよ

³² 幻とはこの世を指し、神の遊戯によるものであり、幻であるこの世を司る主はラーマ神を表している。

³³ ghanasyāma（雲のように黒い者）はクリシュナ神を指し、トゥルシーダースがヴィシュヌ神の化身であるラーマとクリシュナを同一のものととらえていることが伺える。スヴァーティ（第十五宿）の期間の雨水のみで生きることができるとされるチャータカ鳥を自身に喩えて、雨を降らす雲であるクリシュナ・ラーマとの強い結びつきを描いている。

うとも、一生無関心でいようとも（＝雨を降らせなくても）、この心というチャータカ鳥は、それでもあなたに期待します³⁴。

279 チャータカ鳥よ、トゥルシーダースの考えでは、スヴァーティ（第十五宿）であっても水を飲むな。愛の渴望は、増えると良く、減ると決意が消える³⁵。

280 [愛しい雲の名を]繰り返して舌は疲れた。渇きで身は干からびた。トゥルシーダースは語る。[それでも]チャータカ鳥の愛の願いと色は日々新たになる。

281 愛しい雲の罪がチャータカ鳥の心に浮かぶことはない。トゥルシーダースは語る。それゆえ、愛の海を計量することはできない。

282 トゥルシーダースは語る。雲が固い石を降らせて、翼をばらばらにしても、賢いチャータカ鳥は[雨雲に対して]過ちを犯してはならない。

283 雹を降らせ、雷を鳴らし、固い金剛石（稲妻）を落とせば、いつかチャータカ鳥は雨雲を捨ててほかのものをみつめるだろうか？

284 稲妻、雹、稲光、雷鳴、降雨、暴風で強い怒りを示しても、愛しい[雨雲の]怒りを[チャータカ鳥は]過ちと見なさず、喜んで愛を示す。

³⁴ 第 277 番の「雲のように黒い者」は一般にはクリシュナ神を指すが、ヴィシュヌの化身としてラーマと同一視されていることから、ラーマ信仰のトゥルシーダースにとっては、雲はラーマを、チャータカ鳥はトゥルシーダースを指すと解釈される。

³⁵ 愛は満たされると、それ以上欲することがなくなるという意味から、チャータカ鳥にとっては愛しい雨雲の雨水であっても飲まずに常に乞い願う方がよい。

285 トウルシーダースは語る。誇りを守ること、懇願すること、愛しいものに日々新たな愛[を抱くこと]、[これらの]三者はチャータカ鳥の思いを得た時に輝く。

286 トウルシーダースは語る。誇りと愛を守るとはチャータカ鳥を輝かせる。[雨雲だけを]見つめて、雨粒が曲がって[落ちると]、スヴァーティ[の雨粒さえ]敬わず、[雨雲への愛の]定めを貫く³⁶。

287 トウルシーダースは語る。チャータカ鳥は唯一無二の懇願者。雨雲は唯一無二の授与者。[雨雲は]大地の容器(海、湖など)を満たして与え、[チャータカ鳥は]一飲みの水を得る。

289 [贈与者である]雨雲への[懇願者である]チャータカ鳥の愛はとても新種のものと知るべし。世間で恥じ入る懇願者(チャータカ鳥)が、贈与者(雨雲)を[逆に]恥じ入らせた。

290 [チャータカ鳥は]懇願せず、[水を]集めず、頭を下げて[水を]得ない(=常に雲を見上げている)。このように認められた懇願者に、雨雲以外に誰が[水を]与えられようか。

291 生を授ける慈悲深い贈与者が、この世で生き返らせなかった者がいようか。[そんな恵みの]雲が、[チャータカ鳥の]愛を知り、懇願者(チャータカ鳥)に対して恥じ入った。

292 修行の苦しみをすべての者は耐える。成果の獲得はすべての者に喜びを与える。トウルシーダースは語る。チャータカ鳥の喜びと雲の思案は、

³⁶ 雨粒が落ちるのを嘴で受け止めるためによそ見するよりも、愛しい雨雲を一心不乱で見つめ続けたいという意味。

賢者のものである。

293 トウルシーダースは語る。チャータカ鳥に生を与える者（雲）は、生ある時（雨の時）に美しい。チャータカ鳥の愛と信頼は、不可知で不可視である。

294 命あるものとなないものがいる限り、雲はすべてに益を与える。トウルシーダースは語る。雨雲への純粋な愛が、チャータカ鳥の心に宿っている。

295 多くの鳥が森を彷徨い、小池で水を飲む。若きチャータカ鳥よ、お前には、十四の世界³⁷で純白の名声がある。

296 郭公と孔雀とイワシャコは、口は甘い但心は汚い。若きチャータカ鳥よ、お前の純白の名声は世界中で知られている。

297 白鳥の住处、装い、声、動き、心は美しい。トウルシーダースは語る。チャータカ鳥の愛の名声は[さらに]汚れなく広大である。

298 愛を厳しさで測ってはいけない、これは雲の教え。雨雲は荒野に雨を降らせ、チャータカ鳥は罪深いから[雨を得られない]と世間は語る³⁸。

299 トウルシーダースは語る。チャータカ鳥は不義ではない。生を与える者（雲）は愚かではない。プラフラーダの状況から、愛の道は深遠であ

³⁷ ブラフマー神によって守られた神話上の世界の分類。

³⁸ 雨雲が荒野にすら雨を降らせるため、めったに雨をもらえないことについて世間はチャータカ鳥に罪を着せるが、厳しさは愛の深さと比例していないとしている。

ると理解しなさい³⁹。

300 トウルシーダースは語る。すべての者には自らの意図（打算）がある。心で考え、全てにへつらう⁴⁰。利口なチャータカ鳥は[雨雲を]すばらしい贈与者と知り、[雨雲だけの]懇願者になった。



³⁹ プラフラーダはヴィシュヌ神の信者で、父ヒラニヤカシプに殺されそうになるが、ヴィシュヌ神が柱から人獅子となって現れヒラニヤカシプを倒した。この詩節は、ヴィシュヌ神はプラフラーダの信愛を知っていながら、苦しい状況からすぐに救わなかったことを引き合いに出し、雨雲とチャータカ鳥の関係性を説いている。

⁴⁰ garaja には名詞として「意図」の意味があり、動詞の karanā とともに用いられると「へつらう」の意味になる。

参考文献

- Bhadur, S. P. tr. 1997. *Dohavali: An Anthology of Verses on Dharma and Morality*, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt Ltd, (1st ed. 1978).
- Callewaert, Winand M. 2009. *Dictionary of bhakti: North-Indian bhakti texts into Khaṛī Bolī Hindī and English*, New Delhi: D.K. Printworld.
- Mukul, Akshaya. 2015. *Gita Press and the making of Hindu India*, Noida: HarperCollins Publishers India.
- Poddār, Hanunānprasād. 1995. *Dohāvalī*, Gorakhpur: Gītā Press.
- Śukla, Rāmcandra. ed., 1973-77. *Tulasī Granthāvalī*, khaṇḍa 2, Vārāṇasī: Nāgarīpracārīnī Sabhā.
- Tivālī, Hargovind. 1954, *Tulasī śabd sāgar*, Ilāhābād: Hindustānī Ekaḍamī.
- 長崎広子. 2019. 「太鼓と女は叩くべし : 『ラームチャリットマーナス』の女性観」『印度民俗研究』18: 49-59.